

## 自分らしく生きる自由

——ある日の保育の中で考える——

津守 真

保育者は子どもの傍からはなれられない点では、束縛の多い生活である。しかし、子どもが、その生きている小さな世界を、自分らしく生きる自由を約束されたものと見るようになるとき、一緒に生活する保育者は開けゆく一日をたのしみつつ生きることができるとなる。保育者と子どもとは互いに外的に束縛しあうのではなく、人間の内奥の心を通い合わせるにより、それぞれの人生をつくる関係にある。

いつも若い男の先生の手をひき、人のいない裏庭のブランコにゆくことの多いS男が、ある日めずらしく私の手をひいて校長室にいった。私に眼鏡をかけさせ、ソファに坐らせる。最近亡くなったS男の父も眼鏡をかけていた。しばらくの時間何もしないで坐っていたが、私はこうしてゆっくりと一緒に坐っていればそれでよいのだろうと思った。何かをさせようとするのでなく、何を期待するのでもなく、このソファの上に、安らいだ自由感

が生れることが、どんな面白いことをするのにまさるように思われた。ここでは何もしないでも、大人から自分の存在を認められていると子どもが感じるならば、その先は子ども自身がつくり出すだろう。その先の活動を予想して何か材料を出すことすら、この繊細な子どもには心の負担になるように思えた。

こうしてしばらくするうちに、S男は坐っていたソファの背を、ガタンガタンと動かしはじめた。これはこの子どもの小さな能動性である。それをずっとやっていた。この頃のソファは素材が軽く作られているので、背中の部分に体重をかけると簡単に傾斜しともどもどる。校長室にくると何人もの子どもがまずそれをしてから遊びはじめる。子どもにとっては自分の力を使う最初のきっかけに適した運動なのだろう。

間もなくS男は隣室の職員室にゆき、先生の机の上から、学期末の写真帖のための新しいマジックペンの六本入の箱をもってきた。通りかかった先生が、使ったらキャップをしておいてねと声をかけた。S男はそのマジックペンを全部机の上に出すと、それで書くわけではなく、一本ずつ立てて並べた。そして私の手をひいて、ホールに出ていった。新しいマジックペンを垂直に立てた象徴的意味に私が気付いたのは、一日が終って後のことだった。

ホールに出ていったS男は、裏庭のブランコにいった。ここはS男の好む場所で、ときによってはほとんど一日中ここで過したこともある、頭の上に、増築した上階の鉄骨の梁が、水平に垂直に、そして対角線に、むき出しに見えていて、ブランコをこぐと幾何学的

に構成された空間の中の運動であることが印象的である。私は久しぶりにS男に手をひかれたのだから、ここで一日を過すことになってもよいと心をきめてつき合っていた。

ところが、ふと、S男は私の手をひいてホールに入り、トランポリンにのり、私に手を差しのべた。一緒にとんでいるうちに私と交互にリズムがとれるようになった。S男は大きな口をあけて笑った。私はS男がトランポリンにのったのをはじめて見たし、笑うのを見たのも久しぶりだった。リズムカルにとぶようにお互いに調節し合い、相互性をたのしみながら、三十分ほど一緒にトランポリンをとんだ。

いつまでも同じことがつづくように思っても、かならず子どもは自分から変化をつくり出す。S男はトランポリンをおりて、自転車にのりたい様子だった。きょうここまでつき合った私には、S男が自分で自転車にのりたいと思う願望が察せられた。私はS男をサドルにのせ、私は後の荷台に腰かけて、自転車を走らせた。こうすれば、自転車を支配する主人公はS男だという自我感情が生れる。こうしてホールの中を何度も自転車で走った。

つと自転車をおりたS男は、隣室にゆき、棚の上の箱に入った恩物積木を手にとり、蓋をあけ、さかさにして中の積木を出した、そして同じ種類の積木をきちんと箱につめはじめた。そのとき、S男はうんちをしていることに私は気付いた。いそいで便所につれていったが大便を一杯していた。三カ月程前、私がS男と一日つきあったとき、やはり帰りがけにうんちをしたが、少し出ただけで、パンツをかえるとまた少しするという具合であった。家でも同じようで、いちどきに便が出ることがない様子だった。この日は、全部

便を出してさっぱりした顔つきで、パンツをかえると、また恩物積木をひっくりかえしてきちんとつめることをつづけた。

こうして一日を終ったのであるが、ふり返ってみると、人間の発達にとって基本的な体験を、この一日にひとわたりしていることに気がつく。最初校長室でS男は私とゆっくりと過し、存在感を確かにし、そこから能動性が生まれ、次々に自分で活動を選択していった。この場所には自分らしく生きる自由があると子どもが確信するところから能動性が生れる。そのことはマジックペンを立てる行為に象徴されたと云ってもよいのではないかと思う。新しいマジックペンでも先生の机の上からもってくることを許されているとの確信と、自立して行為しようとする決意の表明である。

トランポリンを私とリズムミカルに交互にとんだときには、相互性の体験をし、笑いによって喜びを相手に示した。能動性には真剣さ、相互性には喜びの感情がある。そして自転車のサドルに乗ったとき、自分が主人公になる主体的自我の体験をした。ここには誇らしさの感情がある。これらの人間的体験をなしとげたとき、S男は大便をすっきり体内から放出した。充実感、保持した力を放出したときに自覚される。

こうして、子どもが自分らしく生きる自由を体験したとき、保育者も、自由を内に含んだ生活を子どもと共に生きている。その自由の息吹によって、子どもからはなれられない生活の中で、私も元気づけられる。

(愛育養護学校)